

第2章

思春期の子どもへのかかわりについて



子どもたちは心を発達させていく途中でさまざまなものとの別れを繰り返して大人になっていきます。いつまでもおっぱいを飲んでいたくても、いつかは母親のおっぱいや哺乳瓶とさよならしなくてははいけません。おむつをして、大人に排泄の後始末をしてもらっていた子どももいつの日かおむつがはずれ、自分でトイレができるようになります。成長するにつれて赤ちゃんの頃に遊んだおもちゃや絵本を卒業し、より複雑な遊具や物語を楽しむようになります。そうした子どもの時代への次々の別れをくりかえすうちに、子どもたちは思春期を迎えます。思春期は、子ども時代への別れの総決算の時期です。家庭や学校の中で自分の居場所づくりの練習をしてきた子どもたちが、社会という後戻りの出来ない世界へ飛び立たなければいけない時期です。一人の人間としてのアイデンティティを獲得し、社会の荒海へ泳ぎ出る時期です。社会の中で、本当に自分の居場所が作り上げられるのか。子どもたちは不安でいっぱいです。この時期、混乱しない子どものほうが異常であると言われるくらい、混乱と葛藤の中に子どもたちはいます。大人になった私たちは、自分も通り過ぎてきたはずのこの思春期の不安や戸惑いをついつい忘れがちです。あたかも不思議の世界に迷い込んでいるかのように見える思春期の中の子どもたちに対して、家族や周囲の大人たちが出来ることを考えてみたいと思います。

